

東京学芸大学・先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット 2025
オンライン研修「多様性が活かせることばの教育 2025」 報告

趣旨

子どもたちの多様性が活かせることばの教育をテーマに、2種類の研修を行う。文化間移動をした子どもたちが、その多様性や出身国・地域等での経験を活かし、学級・学校・地域社会の一員としてその力を発揮できることばの教育を受講者とともに構想する。新たな視点とアイデアで、学びの場・内容と活動、そして支援のあり方を議論し、かれらをエンパワーメントすることばの教育を具体的に検討する。

研修Aでは、高等学校における日本語学習支援に関して環境づくりという視点から捉え直して学ぶ。研修Bでは、子どもたちが成長・発達を十全に送るための教育のシステムを考えるために、幼・小・中・高での学習の連続性を意識したことばの教育について検討する。両研修とも、テーマに関連する情報の提供（講義）・現場の取り組み実践例・参加者間の交流／ワークショップで構成する。

I 研修A「多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり」

<ねらい>

高等学校において「特別の教育課程」による日本語指導の制度化が施行されて3年目を迎えた。外国人生徒等が、共生社会の一員として自己を実現するためにも、この制度を利用して日本語指導の充実を図りつつ、その学習を教科学習、キャリア形成、社会的活動への参加等に関連付けて、自己を開拓するための力を育むことが期待される。

研修Aでは、多様な言語的文化的背景をもつ生徒たちが自分の未来を切り開き、社会参画するためのことばの教育・支援を検討する。それには生徒自身が、自分がもつ潜在的な力に気づき、さらにその力を能力として開拓できる、つまりかれらをエンパワーメントすることが重要である。本研修では「日本語指導」を、外国人生徒等が、その多様性を活かして主体的に参加し、新たな価値を創造する「ことばの学習」のための「学習環境のデザイン」という視点で捉えなおす。学習環境を、「活動」「人工物（教材・教具等のリソース）」「コミュニティ（共同体）」の3つの側面からいかにデザインするか、事例や現場の取り組みをもとに具体的に学ぶ。

1 研修A 報告

(1) 第3回研修 概要

日時	2025年8月3日（日）10:00 - 12:30
主たる受講者（対象）	高校で学ぶ外国人生徒等、および高校生相当年齢の子どもに日本語指導・学習支援等の支援を実施している教師・支援者等
テーマ	「ことばの学習のリソース」をデザインするー学習環境の視点から
ねらいとする資質・能力※	<捉える力> キ 子どもたちの暮らしを地域の多文化化や外国人住民支援の状況に関連付けて把握することができる。 ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。 <育む力>

	サ 子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。 <変える力> ハ 外国人児童生徒等が地域にもたらす影響を多様性として肯定的にとらえられるように、マジョリティである受け入れ側に働きかけることができる。
研修内容	1 学習環境デザインの考え方で、目標を共有する人々の繋がりや、主体的参加によって構成されるコミュニティ（共同体）を取り上げて検討する。どこで誰とどのような目標で、どのような活動に参加する経験が、社会的存在として自己を実現するために学び続ける主体性と自律性を涵養するのか、学校・地域コミュニティ・エスニックコミュニティ等、様々な可能性をともに考える 2 「特別の教育課程」による日本語指導を実施している兵庫県立湊川高等学校が、具体的な指導体制や指導内容について報告する。
事前学習課題（参加に当たって）	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）『高等学校における日本語指導の制度化 「特別の教育課程」としての編成・実施について』 <1> 基本的な考え方と制度の解説 <2> 「特別の教育課程」として日本語指導の編成・実施のポイント <3> 高等学校における日本語指導の現状と課題

※文部科学省 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）にもとづく

（2）研修 A 第3回 実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	・研修趣旨のスライド資料
②講義「高校生にとっての社会的学習環境（コミュニティ）」	・コンピテンシー ・向社会性・ソーシャルスキル ・社会関係資本	参考文献： ・国立教育政策研究(2017) ・Berry(1990) ・本ユニット（2023a）「高等学校における外国人生徒等の受入れの手引」 ・本ユニット（2023b）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」
③講義「異文化適応とエスニックコミュニティ」	・異文化適応の4類型「統合」「同化」「分離」「境界化」	
④講義「社会的学習環境とキャリア形成」	・高等学校の実践例； ・クラブ活動、探究活動 ・SDGs、シティズンシップ ・放課後支援組織 ・エンパワーメントモデル	参考文献： ・宮城県国際化協会(2019) ・佐藤（2015） ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」
③事例報告	報告：湊川高等学校における「日本語指導」の取り組み 2年目の実施状況 兵庫県立湊川高等学校（定時制）	講師作成スライド

④グループワーク

「生徒が能動的に相互作用をするコミュニティについて」

⑤ 振り返り

教諭 金子 大樹氏

質疑応答：

口頭で・チャットへ書き込みで

小グループで話し合い

①自己紹介一人1分（活動している場所と名前）

②生徒のコミュニティでの活動について、紹介し合う。

アンケート記入

- ・満足度
- ・今後の活用のアイディア
- ・資質・能力の向上の有無

グループ活動の課題

グループワーク 11:45-12:10 (25分)

「生徒が能動的に相互作用をするコミュニティについて」

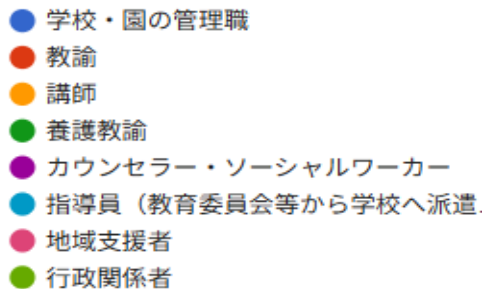
- 1 グループ(ランダム 5人程度)に分かれて、次の活動を行ってください。
- ① 自己紹介～人1人(活動している場所と名前)
- ★先行とメモを取る人を決める (バドミントンメモ)
- <https://swafel.com/shirom20110126/a> 3 -2025- 8-31 11:45-12:10 4a38777zyr@zeio.net
- ② 生徒のコミュニティでの活動について、紹介し合う。
- ✓ 生徒たちが、教室以外での活動にもコミュニティで通っているか。
- ✓ そのコミュニティの目的・目標について、生徒は何語解読や課題遂行に主体的にかかわっているか。その際、日本語としてどのよう、多様性や特徴をどう発揮しているのか。(具体的なエピソードをで紹介ください。)
- ✓ そのコミュニティ自体に、(具体的な)参加する意欲があつたか。

参考文献·資料

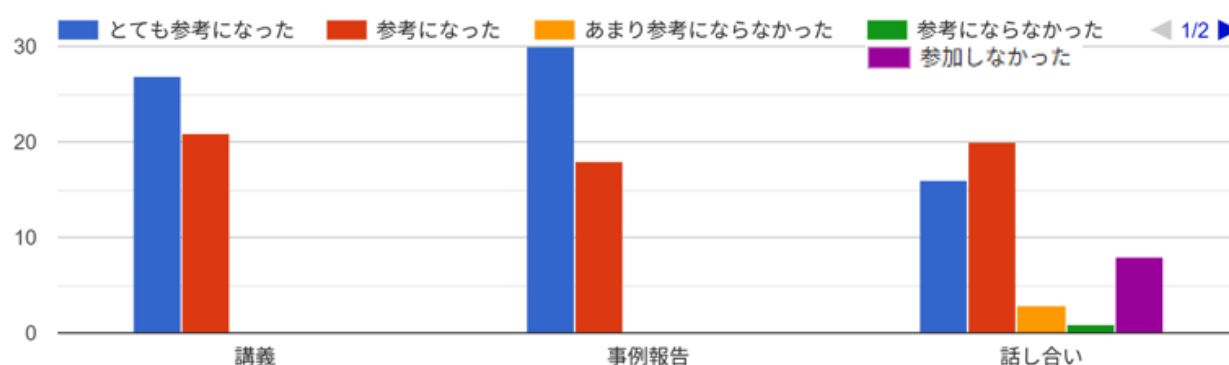
- ・Berry, J. W. 1990 Psychology of acculturation. In RW. Brislin (Ed.), Applied Cross-cultural Psychology. Newbury Park, California: Sage. Pp. 232-253. Bochner
- ・国立教育政策研究所 (2017) 『非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』 研究代表者 遠藤 利彦（国立教育政策研究所）
- ・本ユニット 2023 年度研修報告書
- : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M23_kenshu04_ogikubo2.pdf
- ・本ユニット（2023a）「高等学校における外国人生徒等の受入の手引」
- : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_tebiki.pdf
- ・本ユニット（2023b）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」
- : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf
- ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」
- : <https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html>
- ・宮城県国際化協会編 (2019) 「外国籍児童生徒サポート事例集～多文化な子どもたちの未来をひらくために～」
- ・佐藤 寛 編 (2005) 『援助とエンパワーメント』 アジア経済研究所

参加申し込み数：104 当日参加者数：99 アンケート協力者数：48（回収率 48.4%）

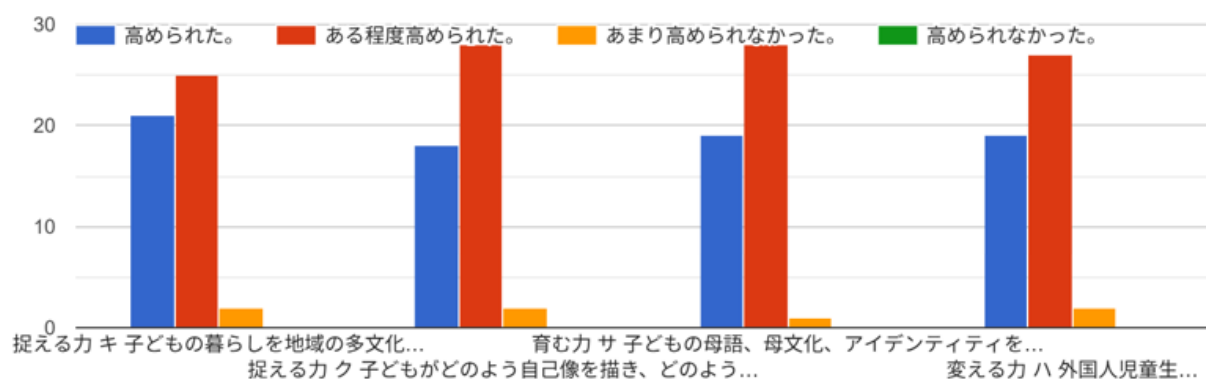
① 参加者の背景（立場）



② 満足度「参考になったか」



③ めあてとした資質・能力の向上について



④ 寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

- ・ 近い将来各県で実施される見込みの、外国に繋がる高校生への日本語支援の枠組みや具体的なプログラム、実施例を知る事が出来た。地域のサポーターとして、どのような伴奏者になる可能性があるかを考える大きな助けとなった。
- ・ 異文化適応の4タイプのうち、「統合」を望んでいる外国にルーツのある子どもたちと目指している日本語指導に関わっている人々の活動や実際を知ることができた。事例報告や話し合いでも、なかなか難しい課題であるが、研修を通して、前進する力になっていると思う。
- ・ ご講義の中で具体的な指導のアイデアをお話いただきとても勉強になりました。頭が硬くなっているので理念に基づいた実践の流れを教えていただきありがたかったです。また、報告者のあたたかいお人柄が溢れる受け入れ体制構築や日本語指導のための職員での共通理解など、お話をお伺いして、もう一度見直す必要があると感じました。
- ・ 湊川高校の実施状況を聞き、自分達ももっと活動する可能性があると感じました。非常勤で、情報を希望され、提供なら可能だとしていますが、実際の活動決定には参加できないまま、個人活動範囲での活動で過ごしてきました。このままのままでいいか、何かの動きをかんがえようと思います。
- ・ 今行っている実践がいいのか批判的に捉え直すきっかけになった。

- ・ 前から思っていたことではありますが、自分の教室内の改善に留まっていはいけな
いと改めて感じました。講師の立場では難しい面もありますが、教諭の先生方に働きかけ、
周囲を巻き込みながら、生徒たちの学習環境を少しずつでも改善していきたいと思いま
す。私自身の向社会性を高めていく必要性を強く感じました。
- ・ 勤務校内の外国にルーツのある児童が学級内で社会参加できるように支援していき
たい。今年度の日本語指導担当者に本研修で学んだことを伝えたい。そのことで、現在日本
語学級に通級している児童へ間接的に伝わってほしい。

④ 「特別の教育課程」の実施について（高等学校所属 24 人中）

前回、回答済み : 16 人
「特別の教育課程」を実施 : 5 人
「検討中」 : 0 人
実施は「難しい」 : 3 人

<現状について>

実施しているとの回答から

- ・ 日本語 I A をはじめとする 16 科目を、特別の教育課程として実施している。評価につ
いて、各担当による評価のばらつき、関係教員間の共有など難しさを感じている。
- ・ 一年生を対象に週一度（45 分×2 コマ）実施。他に学校選択科目としての日本語指導を
週一度（45 分×2 コマ）実施

実施は「難しい」との回答から

- ・ 今は特別の教育課程で実施しておりませんが、本日の話を聞いて、例えば放課後の時間
を使った自由参加の日本語学習会などの開催を、単位習得につながる特別の教育課程に
位置づけていくことも効果があると感じたので、検討まではいかないかもしれないけれ
ど、選択肢の一つとしてもっておきたいと思います。

<企画・実施者の所感>

第 3 回 学習環境としてのコミュニティのデザインがテーマであったが、グループワークで
は、意見が出にくいグループとよく話せたグループがみられた。参加者の感想に「今回の研
修はハードルが高い」とあったが、生徒と周囲が変容するという、日本語学習を含めた学び
の本質的な目的を認識する機会となつてほしいと考える。講師の金子先生は外国籍の出身
で、また、課題を抱える生徒が非常に多い高校で教えられていることが、参加者を講話に引
き付ける大きな要素となったと感じる。Well-being が問われる時代にあつて、学校のすべて
の生徒に配慮しながら学習を進めることの大切さが認識できた。

4 資料（URL にアクセスすれば、ダウンロードできます）

- ① 講義 学習環境としてのコミュニティのデザイン～生徒の主體的な学びとキャリア形成を
促すために～ 市瀬智紀 宮城教育大学
- ② 報告資料 金子大樹 兵庫県立湊川高等学校

Ⅱ 研修 B「幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育」

＜ねらい＞

多様な言語的文化的背景をもつ子どものことばの教育では、心身の成長発達や子どもたちを取り巻く環境をふまえながら、来日初期から子どもたちが自分らしく、もてる力を十全に伸ばしながら成長するための教育を実現することが重要である。本研修では、幼・小・中・高の各教育段階で子どもの発達の状況に応じて教育内容・方法を探るとともに、長期的な視点で校種間の学びの連続性を保障する教育・支援について考える。学校でのスムーズな受け入れとその体制づくり、文化的な適応や地域支援との関わり、そして、初期段階のコミュニケーションから教科学習、そして自己実現のための日本語の力の育成を目指す日本語指導について、考え方を知り、教育現場の実践事例を通じて理解を深める。さらに、ワークショップ型の活動を通して、明日からの指導・支援に生かせるようアイディアを具体化する。内容は、初めて日本語指導を担当することになった教師や支援活動を始めた支援者を主な参加者として構成してある。

なお、参加にあたっては、本ユニットが作成した動画（参加者限定公開）の事前視聴による事前学習を求める。

1 研修 B 報告

(1) 第3回研修 概要

日時	2025 年 8 月 3 日（日）13：30 - 16：00
主たる受講者（対象）	「今年、初めて」、「まだ、経験は数年」という日本語指導・支援に携わる学校教員・支援員・支援者の方
テーマ	「アイデンティティと関係づくりを支える ～ことばの教育実践を通じて～」
ねらいとする資質・能力※	＜捉える力＞ イ 子どもの心理的状況を文化適応や家庭の状況に関連づけて理解することができる。 ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化と共に展望することができる。 ＜育む力＞ タ 子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。 チ 子どもの文化間移動の経験や言語的文化的多様性を価値付け、周囲の子どもの学びに結びつけることができる。
研修内容	1 グループワーク 持ち寄った自身の言語ポートレートを共有し、研修内容についての学びの準備をする。 2 事例共有と講義 長島ヒデキ先生（岐阜大学教育学部附属小中学校）のライフストーリーを手掛かりに、ことばとアイデンティティの関係性についての理解を深める。 3 事例共有と講義 長島ヒデキ先生の教員としての経験をもとに、アイデンティティと関係作りを支える教員のあり方について考えるための視点を得る。 4 グループワーク 長島ヒデキ先生のお話から、ことばの教育実践に携わる自身のあり方についてふり返る。

事前学習課題 (参加に当たって)	次の研修用動画の視聴 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット (2025)『初めて教える人のための 田中先生と学ぶ子どもの日本語指導』 講座6 未来を拓く教育 ―子どものアイデンティティと教師の成長― パート1 子どものアイデンティティと学習 アイデンティティ パート2 子どものアイデンティティと学習 青山先生インタビュー (インタビュー映像)
---------------------	--

※文部科学省

「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」(日本語教育学会 2019)にもとづく

(2) 研修B 第3回 実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	研修趣旨のスライド資料 齋藤 (2022) / 日本語教育学会 (2020)
②講義・演習「アイデンティティと関係づくりを支えることばの教育実践―幼児期から青年期までの学びをつなぐために―」		
1. ウォームアップ	・グループで言語ポートレートを共有する	講師作成スライド 参考文献 ; Busch, Jardine, & Tjoutuku (2006) / Prasad (2014)
2. 事例共有・講義「ことばとアイデンティティについて考える～長島先生のライフストーリーをもとに～」	・長島ヒデキ先生の子どものころのストーリーを聞く ・事前動画のおさらいと講義に基づきアイデンティティとは何かを確認する ○他者との関係性 ○言語の役割 ○流動性と複数性	参考文献 : Gee (2000), ノートン (2023)
3. 事例共有・講義「ことばの教育実践に関わる教員のあり方を考える～アイデンティティと関係づくりを支えるために～」	・長島ヒデキ先生の教員としての考え方や実践を聞く ・アイデンティティと日本語学習を結びつけるための視点を獲得 ○関係性を広げる ○ライフコースを考える ○資源を活かす ○エージェンシーを育む	参考文献 : Cummins & Early (2011) / García & Li (2015) / 文部科学省 (2023) / 米本 (2021) / Allport (1954)

4. 質疑応答 ③グループワーク「長島先生のお話からことばの教育実践を考える」 ④ふり返り	○市民性を育む ○ばをつくる ①全体：作業の説明 ②グループ（4人前後）： 個人作業の共有 ③全体：グループでの話し合いの共有 3回の研修内容をふり返る アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用アイディア ・資質・能力の向上の有無	グループワーク課題 ①幼少期から青年期において、ことばの教育に関わる者の役割について考えたことを話し合ってください。 ②自身のことばの教育実践・支援の何を変えていこう、どう変えていこうと思いますか。 例）資源として母語・母文化を取り入れて／家族家庭の経験と関連づけて／周囲の子がその子の持ち味を認める機会を作って
--	--	---

参考文献・資料

- ・ 齋藤ひろみ（2022）「外国人の子どもを取り巻く問題」 柘植雅義監修・齋藤ひろみ編著『外国人の子どもへの学習支援』金子書房
- ・ 日本語教育学会（2020）『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』<https://mo-mo-pro.com/report>
- ・ ボニー・ノートン（2013/2023）『アイデンティティと言語学習—ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐる広がる地平—』（中山亜紀子・福永淳・米本和弘訳）明石書店
- ・ 文部科学省（2023）「教育振興基本計画」https://www.mext.go.jp/content/20230615-mxt_soseisk02-100000597_01.pdf
- ・ 米本和弘（2021）「「国＝文化＝人」を問い直す試み—小学生と留学生の交流活動を事例として—」『複言語・多言語教育研究』8, 183-193
- ・ Allpot, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Addison-Wesley.
- ・ Busch, B., Jardine, A., & Tjoutuku, A. (2006). *Language Biographies for Multilingual Learning*. PRAESA.
- ・ Cummins, J., & Early, M. (2011). *Identity texts: The collaborative creation of power in multilingual schools*. Trentham Books
- ・ García, O., & Li, W. (2015). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan.

- Gee, J. P. (2000). Identity as an analytic lens for research in education. *Review of Research in Education*, 25, 99-125.
- Prasad, G. L. (2014). Portraits of plurilingualism in a French international school in Toronto: Exploring the role of visual methods to access students' representations of their linguistically diverse identities. *Canadian Journal of Applied Linguistics*, 17(1), 51-77.

3 成果

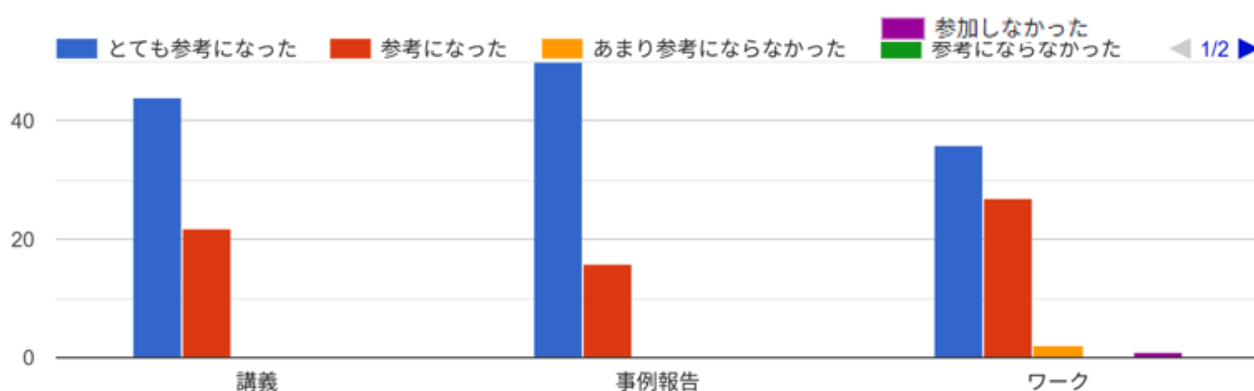
参加申し込み数：111 当日参加者数：101 アンケート協力者数：66（回収率 65.3%）

<アンケートより>

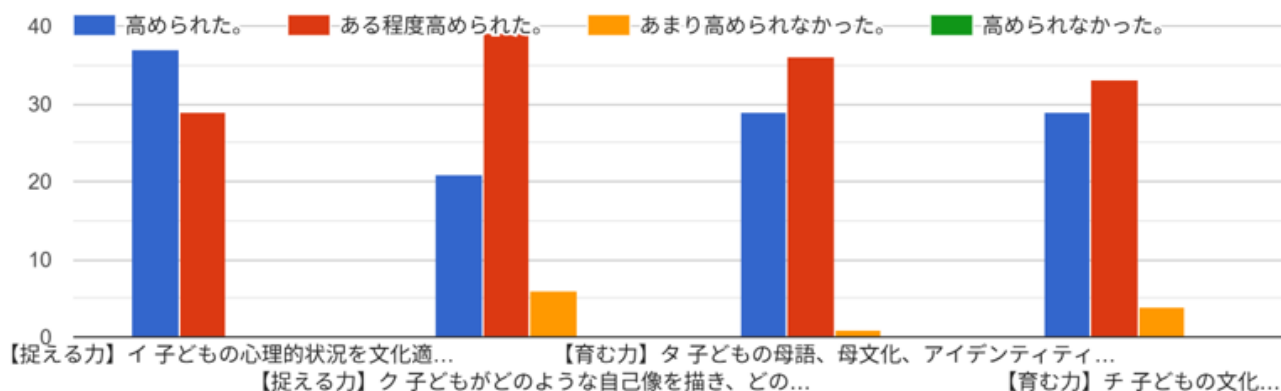
①参加者の背景（立場）



②満足度「参考になったか」



③めあてとした資質・能力の向上について



④寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

・ 言語ポートレートに始まった、今回の研修の流れがとても新鮮でした。最後のグループでの意見交換もとても有意義な時間になりました。現在関わっている外国ルーツの児童に対し、より「自分ごと」として接することができそうです。関わっている児童が今後どう成長していくか、結果を見ることはできませんが、長島先生のようなあたたかな心を持った大人になると信じて、関わっていきたいと思いました。ありがとうございました。

・ 深遠なテーマを簡単で面白い事前課題から導入してくださってよくわかり普段あまり考えないことを立ち止まって考える時間になりました。その後の長島先生のライフストーリーも貴重な人生を共に歩めた想いがしました。ただ、それを自分の教育実践にどう活かすかというところは、なかなか難しく、今日学んだことをいつも心に留め置きつつ、日々の活動を行い、その中の瑣末なことでも繋ぐことができれば良いのかなあと考えています。また、今回グループワークが初めにあって、途中退場の方がいなかったのも良かったなあとと思いました。

・ ライフヒストリーを具体的に伺うことで、直面する困難やアイデンティティの問題を切実さを伴って理解することができました。言いにくいかもしれないことも率直に語ってくださって、感謝しています。また、グループワークで異なる地域の多様な現場のお話を伺うことができ、年齢層や日本語力によって課題が多岐にわたることが実感できました。そして、今自分が携わっている現場を相対化して考えることができました。地域による制度や人員配置のちがいも印象に残りました。

・ 今まで、何度か研修等でアイデンティティという言葉に触れ、自分でも使うことがあったが、いつもぼんやりしたイメージから離れられずにいるが、今回の研修で先生方のお話を伺って、少し自分の中にその言葉が生きた語としてうごめき始めた気がする。日々子どもに向き合う中だけでなく、自分自身を見直す機会ももって今日の講義内容をもう何回か振り返ってみたいと思う。

・ 子ども同士の交流を作るということで、市の教育委員会として、学校内では1人でも、いくつかの学校の児童生徒があつまり、日本語指導の中で交流ができるような時間や場所を作ることができると思いました。また、私自身、外国にルーツを持っているため、その

経験を活かしてさらに生徒に寄り添って、縦・横どちらも支えられるような立場になりたいと思いました。

・ 連続した学びの一部である、という考えを忘れずに、そしてベースは子どもに安心した環境を提供することではあるけれど、その中で一つでも子どもたちが自分の言葉としての日本語を身に付けられるようにしていきたいと思う。

・ 今回の講義を通して、「捉える力」「育む力」「つなぐ力」に関して深く意識することができました。ただ、それを教育活動や支援に行かせるかどうかは明日からの課題だと思います。自分の立ち位置では難しいこと(特につなぐ力に関して)は管理職などに伝えることで、道が繋がれば、と思います。ありがとうございました。

<企画・実施者の所感>

研修B第3回では、自身も外国にルーツを持ち、現在、日本の学校で教員をなさっている長島ヒデキ先生のご経験を伺うことを通して、言語学習とアイデンティティとの関係性、そして、そこに携わる者としての自身のあり方を考えました。長島先生は、子どもころから現在に至るまで、学校や家庭でどのような経験をし、どのように感じていたのかを、率直に語っていただきました。アイデンティティと聞くと国や言語、文化といった固定的な属性に結びつけられがちで、例えば、自身のルーツの国について調べたり、発表したりといった実践を目にすることが多くあります。それら固定的な属性もアイデンティティを考える上で必要な要素ではありますが、長島先生のお話からは、子ども一人ひとりの個に目を向け、迷ったり悩んだりするときにも寄り添いながら、必要な指導支援を考えていくことが私たちには求められていることがわかりました。これは言語教育の他の要素も同様ですが、アイデンティティについて考える際にも、一つの内容や方法を全ての子どもに当てはめられるわけではないこと、今の学びが将来につながっており、それを見据えた取り組みが必要であるということ、そして、それを常にモヤモヤと考え続ける必要性を企画・実施者も参加者も共有することができました。貴重なお話を聞かせてくださった長島先生に感謝申し上げるとともに、自己を開示することが必要な活動に真摯に取り組んでくださった参加者の皆さんにお礼申し上げます。

4 資料（URL にアクセスすれば、ダウンロードできます）

①講義資料 [米本和弘 東京学芸大学](#)

②報告資料 [岐阜大学教育学部附属小中学校 長島ヒデキ](#)